

一高における中国人留学生受け入れの歴史 — 個人情報を含む新出資料の整理・調査・公開に向けて —

宇野瑞木

東京大学大学院総合文化研究科・東アジア藝文書院 (EAA)

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 101 号館 15 号室

E-mail: mizukiuno825@gmail.com

あらまし 東京大学東アジア藝文書院 (EAA) では、2019 年度から東京大学教養学部の前身である第一高等学校における中国人留学生受け入れの歴史について調査・研究を行う「一高プロジェクト」を立ち上げ、駒場キャンパスに所蔵されている留学生資料の発掘・整理・公開・展示といった活動を行ってきた。本発表では、本プロジェクトが発足した経緯とその意義、そしてコロナ禍に見舞われる中で、展示を多くの方に見ていただくための方法を模索し、Web サイトでの展示やショートドキュメンタリー制作などを試みてきたことを紹介する。さらに現在、その発展形として「一高プロジェクト」内での「映像制作」のプロジェクトと未整理の新出資料である「藤本文書」のアーカイブ化という 2 つの取り組みが遂行中である。本報告では、特に後者の取り組みに焦点化して、個人情報を含む資料の公開にあたっての諸問題についての検討も含め、現時点での活動報告を行いたい。

キーワード 第一高等学校、中国人留学生、個人情報、新出資料の活用・公開

History of accepting Chinese students at *Ichiko*

Toward the organization, investigation, and disclosure of new materials including personal information

Mizuki Uno

Graduate School of Arts and Sciences, The East Asian Academy for New Liberal Art, UTokyo (EAA)

3-8-1 Komaba, Bldg. 101, Rm. 15, Meguro-ku, Tokyo, 153-8902 JAPAN

E-mail: mizukiuno825@gmail.com

Abstract The East Asian Academy for New Liberal Art, The University of Tokyo (EAA) is a joint research and education program organized collaboratively by the University of Tokyo and Peking University. EAA launched the "Ichiko Project" for Chinese students of the First Higher School (*Daiichi-Koto-Gakko*, known as "Ichiko"), the predecessor of the faculty of the college of arts and sciences of the University of Tokyo, in 2019. In this presentation, we will explain the background of the project's inauguration and its significance, and then introduce that we have made attempts such as Web exhibition and short documentary film production under the influence of COVID-19. In addition, I will report on the outline of the activities of the project "Fujiki Document Archive" that started in June this year.

Keywords The First Higher School (*Daiichi-Koto-Gakko*, "Ichiko"), Chinese students, personal information, disclosure of new materials

1. 「一高プロジェクト」発足の経緯

「一高プロジェクト」とは、2019 年 4 月に始動した東京大学の「東アジア藝文書院 (EAA)」[1] において運営されているプロジェクトである。この EAA とは、東京大学と北京大学の共同教育研究プロジェクトであり、東アジアからリベラルアーツを発信し、新しい学問を構想するという理念

を掲げ、両大学が共同で 30 年後の世界を担う人材を育成することを目指すプロジェクトである。

では、「一高」つまり「第一高等学校」が、この EAA とどのように関わるのか。このすべての発端は、東京大学駒場キャンパス内に建つ「101 号館」にある。



「101号館」正面玄関（宋舒揚撮影）

「101号館」は、今ではほとんど知られていないが、かつては「特設高等科教室」（通称「特高館」）と呼ばれ、東京大学教養学部の前身である第一高等学校（以下、一高）における中国人留学生のための三ヶ年の課程「特設高等科」（1932年設置）の専用教室として、1936年に建てられた建物であった。そして、EAAの駒場オフィスは、期せずしてこの留学生受け入れの歴史を刻む「101号館」に居を構えたのである（EAAは、本郷キャンパスの東洋文化研究所内にもオフィスを持つ）。

EAA副院長の石井剛氏は、1930年代後半から日中戦争に突入していく時期、そして敗戦を迎えた激動の時代に、一高において中国人留学生を受け入れ教育を行っていた歴史の陰影を刻む建物に入居したことを深く受け止め、その歴史を鑑としながら、東アジアから新しい学問の未来を構想するために、「一高プロジェクト」を発案したのである。

すなわち、「一高プロジェクト」とは、101号館という歴史的建造物をはじめ一高時代の留学生に関する資料の調査・公開等を通して、駒場に刻まれた歴史に学び、未来へと記憶を継承し、ここから新しい学問のありかたを構想・発信することを目指す活動であるということになる。

以上の経緯の中で、EAAの初年度に取り組み始めた活動は、下記の3つである。

- (1) 「藤木文書」の仮の目録作成及び駒場博物館への寄贈
- (2) 「101号館」の歴史に関する展示企画とパンフレットの刊行
- (3) 上記の関連イベントとしての国際シンポジウムの開催

(1) については、最近の動きとともに後で詳述

するため、まずは(2)の展示とその関連イベント(3)について簡単に紹介しておきたい。

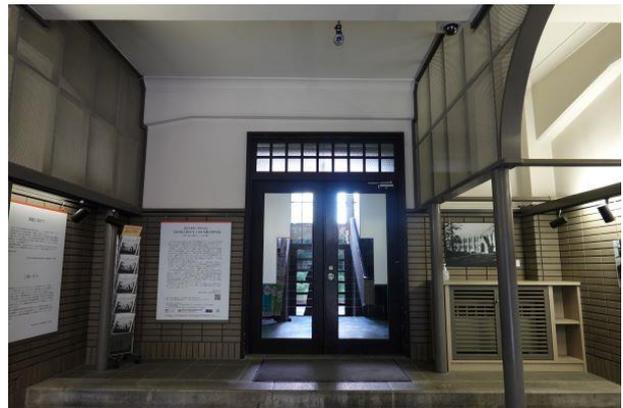
2. 企画展示「一高中国人留学生と101号館の歴史展」の開催（2020年2月～）とコロナ禍 2-1. 展示内容

「一高プロジェクト」では、2020年2月より「一高中国人留学生と101号館の歴史展」と題した展示を開催する予定で準備を進めていた。会場は、東京大学駒場キャンパスの下記の二か所の予定であった。

会場1：101号館エントランス（会期：2020年2月7日～現在も展示中）

会場2：駒場図書館1階展示コーナー（会期：2020年3月20日～4月2日） ※延期

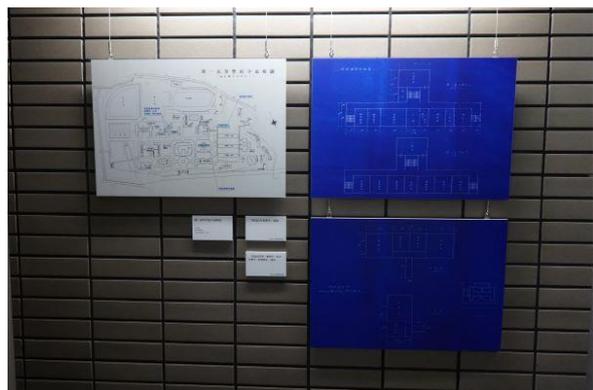
しかし2020年年明け以降の新型コロナウイルス感染拡大の事態を受けて、会場1のパネル展示は実現したものの、会場2の実物展示については、延期とせざるを得なくなった。



「101号館」エントランスでの展示の風景（会場1）
（宋舒揚 撮影）

会場1の展示は現在も開催中で、主に駒場博物館に所蔵されている昭和10年（1935）前後の一高の駒場移転の時期における一高留学生に関する貴重な資料16点をパネル展示している。

具体的なラインナップは、当時の駒場キャンパスの航空写真から始まり、「特設高等科教室」（現101号館）、「特設高等科・物理学・化学・生物学・特設教室」の図面や特設高等科の修了証書、卒業写真、当時の一高校長・森巻吉に関わる写真、学生寮や「一高駅前」の風景の写真、さらに運動部で大活躍した留学生・張興漢に関わる写真、留学生と日本人学生の交流に関わる新聞記事、そして現在の駒場の航空写真となっている。



第一高等学校平面略図、特設高等科教室の図面など(会場1) (宋舒揚 撮影)



森卷吉、「一高前駅」、寮風景、張興漢に関する写真(会場1) (宋舒揚 撮影)

会場2では、第一に、駒場図書館所蔵の清国留学生受け入れ開始時の一高校長・狩野亨吉の時代(明治30年代)の留学生関連資料、第二に、一高の駒場移転時の校長・森卷吉の時代(昭和10年前後)の留学生関連資料を実物展示する予定であったが、先述のように延期となって今に至っている。

ただし、会場1・2で展示する全資料に関しては、解説文を掲載したパンフレットを発行し(3月20日付)、会場1にて配布している。その後、中国語版も発行し、後述のように、ともにEAAのHPにてダウンロードできるようになっているので、ぜひご覧いただきたい。

また、本展示の関連イベントとして、2020年3月に中国人留学生受け入れの歴史に関する国際ワークショップを企画していたが、こちらもやむなく延期となった。

2-2. ショートドキュメンタリー制作

以上のように情勢が不透明な中で、2020年度は、

コロナの影響が収まってキャンパスに人が戻るのをただ待つのではなく、オンラインで発信していくことを積極的に試みる方向へ舵を切った。

もともとEAAのHP上では、「一高プロジェクト」の活動についてブログにて随時報告してきたが、それとは別に新たに「一高プロジェクト」のコーナーを設けて、そのコーナーを拡充していったのである〔2〕。

最初に取り組んだのは、展示会場1を体感できるような形で紹介するためのショートドキュメンタリー「一高中国人留学生と101号館の歴史展——駒場に眠る留学生資料とともに」(18分弱)の制作であった。この映像作品では、単に展示風景を映すのではなく、企画者が登場し解説することで、プロジェクトの経緯や展示の背景を知ってもらうことを目指した。



EAAの「一高プロジェクト」のサイトのスクリーンショット

特筆したいのは、本郷キャンパスの建築物を一手に手掛けた建築家の内田祥三が、一高の駒場移転の際に、一高生が雨に濡れずに寮から教室などへと移動できるようにと設計したと伝えられる「地下通路」を撮影している点である。



この地下通路は、現在立ち入り禁止となっているが、かつては一高生たちが日常的に往来し、また戦時下には防空壕としても使われていた。今回、特別に許可を得て撮影された101号館の階段

を下りて、地下通路に潜入していく映像は、あたかも建物に沈殿する歴史・記憶の層へアクセスすることを象徴するような、そしてそこで複数の声に耳を澄ますような感覚が喚起されるものであったように思われた。

また、留学生たちも歌っていたという一高寮歌を、本プロジェクトのリサーチアシスタントの高原智史氏が高らかに歌う声の響きも印象に残る作品になっている。

但し、当時、「中国人留学生」といっても中華民国と満州国といったように幾重にも分裂させられていた留学生たちの苦悩、本科生との断絶と疎外感、日中戦争が激化していく中で日本に留学していた厳しい状況等について深掘りすることができなかったことが反省点として残った。この映像制作の試みと一高という場所の多層性や分断についての着目は、2020年冬から2021年にかけて発足した「映像制作ワークショップ」という活動へと引き継がれ、本格的な映画製作へと展開を遂げることになる（詳細は注〔2〕HP参照）。

2-3. 展示物の Web サイトでの公開

さて、依然として会場2の展示の開催の目途が立たない中で、EAAのWebサイト上で展示を公開することにした。



会場2の展示品のひとつ。明治32年(1899)に一高へ留学した章宗祥の書簡

現在、EAA内の一高プロジェクトのサイト上で、会場1・2〔3〕〔4〕の展示物の写真と解説をご覧いただくことができる。なお、本展示サイトから、先のパンフレットのPDF（日本語版／中国語版）をダウンロードできるようになっている。

このWeb展示でようやく初公開となる会場2の展示物は、明治30年頃から昭和10年代に至る時期に、一高に留学してきた中国人学生の受け入

れに関わる公文書や書簡類、また彼らの学業・生活、内面に抱えていた問題や日中学生・教員との交流の様子などを生き生きと伝える資料群であり、ぜひ多くの方にご覧いただきたい。

2-4. 国際シンポジウムの開催

加えて、先述の延期されていた展示企画に伴う国際シンポジウムについても、2021年3月17日にオンラインにて開催に漕ぎつけることができた。詳細な報告ブログ〔5〕があるので詳細は割愛するが、一高を中心とした中国人留学生受け入れの歴史に関する専門家を招き、総勢12名の登壇者によって、日中の近代教育史・学問史、さらに戦時下の時代性と一高の教養教育の意義と限界、今後の日中関係や大学のあるべき姿、東アジアの未来の展望など、様々に議論が交わされた。この内容は論文集として今年度中に刊行される予定である。

なお、以上に述べた展示企画と関連シンポジウムは、田村隆・東京大学准教授の科学研究費・基盤研究(C)「狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究」との共催という形で企画されたものである。会場1については、筆者とリサーチアシスタントの高原氏の他に、宋舒揚氏（当時、東京大学大学院総合文化研究科・博士課程）が調査・執筆にあたり、会場2は、以上3名に加え、狩野時代の資料に関して、田村氏とともに、同科より川下俊文氏（東京大学大学院総合文化研究科・博士課程）、鶴田奈月氏（当時、東京大学大学院総合文化研究科・修士課程）の両氏が調査・執筆を担当したことを付記する。

3. 「藤木文書アーカイヴ」の取り組み

3-1. 「藤木文書」の目録作成及び駒場博物館への寄贈（2019年春～11月）

最後に、「一高プロジェクト」の活動の(1)に掲げた「藤木文書」の整理・公開への取り組みについて述べたい。2019年春に、「藤木文書」と現在称している留学生関連の未整理資料の存在を知った。「藤木文書」とは、駒場キャンパスに保管されていた段ボール箱一箱分ほどの未整理文書類である。2019年5月頃に、この史料の整理作業を請け負ったEAAでは、古文書保存用の封筒及び箱を購入し、筆者と高原氏で目録作成に当たった。なお整理作業を進める方法については、駒場博物館の折茂克哉氏および駒場図書館蔵の一

高校長・狩野亨吉の遺した書簡類のアーカイブ化を行う科研を遂行されている田村隆氏に指南いただいた。こうして整理作業を進めていく中で、この史料群は 1943-45 年頃に一高で留学生課長をしていた藤木邦彦氏の残した公文書、校務書類、書簡類であるということが判明した。その後教養学部歴史学部会の山口輝臣氏の協力を得ながら、故藤木邦彦氏のご遺族を探し、幸運にもご子息・成彦氏とご連絡が取れて、年末には成彦氏の本プロジェクトへの深いご理解とご厚意により駒場博物館へと全面的に寄贈頂く運びとなった。ここに改めて記し、深く感謝申し上げたい。また、その折に本史料を「藤木文書」と通称することとした。

「藤木文書」は、終戦間際の困難な時勢における一高の留学生教育の現場、またその中で留学生課長として中国人留学生一人一人に寄り添う藤木邦彦氏の態度が窺える貴重なものとなっている。小規模なコレクションではあるが、状況がわかりにくい戦時下の貴重な一高資料であり、今後の幅広い活用が期待される。

3-2. 「藤木文書アーカイブ」始動 (2021 年 6 月)

2019 年冬に駒場博物館へと寄贈がかなった「藤木文書」であるが、コロナ禍に見舞われ、調査が進められずに、再び長い眠りにつくかに見えた。

しかし、その眠りから呼び覚ましたのも、またコロナ禍であった。2020 年度に入っても非常事態下で大学という場での教育活動がままならない状況が続く中、改めて大学という場の質や意義が問い質されることとなり、一方で歴史的な厚みや人と人の関係性、そこで学ばれてきた息吹のような感性的なことも含みこんだ大学の場所性や建物自体の意義も見直されたように思われる。そうした環境でこそ育まれる教養という側面が再評価される中で、戦時下の非常事態下で同じく駒場キャンパスに学生がいられなくなった時期の、一高の教養教育の現場を伝える本史料の意義が浮かび上がってきたのである。

2021 年 6 月より、もともと藤木文書の整理作業を行ってきた筆者と高原氏に加え、新たに、リサーチアシスタントとして横山雄大氏、日隈修一郎氏、小手川将氏、そして既に展示準備から協力を得てきた宋舒揚氏も加わる形で、「藤木文書アーカイブ」と名付けられたプロジェクトが立ち上がることとなった。

改めて、本プロジェクトは、「藤木文書」すな

わち現在駒場博物館蔵の未整理資料であり、1943 年から 1945 年頃に一高の留学生課長であった藤木邦彦氏が遺した「特設高等科」の校務書類、公文書、書簡等で構成された留学生関連資料について、整理・調査・公開を行う活動である、といえる。本年度の目標としては、下記の 4 点を掲げている。

- (1) 「藤木文書」を使える状態に整えるために再整理し、本史料の性質にふさわしいアーカイブの方法も検討する。
- (2) 一高生および特設高等科生等へのインタビューとその記録のアーカイブ化
- (3) 研究発表により史料の具体的な活用法を示す
- (4) 2022 年 3 月に駒場博物館にて展示を行う

この中で、(3) については、既に 2021 年 9 月 28 日に旧制高等学校記念館主催の「第 25 回夏期教育セミナー」にて、「新出資料「藤木文書」の紹介——戦時下の一高留学生課長・藤木邦彦と留学生たち」という題で共同発表会を実施した(オンライン開催。YouTube にて 2021 年 8 月 27-31 日の期間限定公開) [6]。

3-3. 一高卒業生などへのインタビュー

また (2) については、一高卒業生のインタビューが可能な方の高齢化が進んでいるため優先的に行っており、現在までに、一高卒業生及び関係者(特高生含む) 8 名にお話を伺うことができた。内訳は、一高卒業生など(本科生、関係者) 6 名と特設高等科卒業生 2 名である。戦前の一高の状況を知る方々は既に 95 歳を超えており、コロナ禍での対面のリスクを避けて、電話や書簡によるインタビューが主となった。但し、ご本人の許可を得て、対面インタビューが実現した例もあり、ブログにて詳細な報告を行っている [7]。中でも「藤木文書」の生徒名簿に名前が見える特設高等科卒業生の方に電話口にてインタビューを実施できたことは大きな意義があり、本科生の一高とはまた別の留学生たちの体験した「もうひとつの一高」があったことを改めて実感することができた。

「藤木文書」の名簿や書類にその名前が見える人物から現在の肉声が与えられたことで、本史料が立体的に立ち上がってくるような感覚を得られたことは、私達がこれから本史料を中心に展示を企画する上でも欠かせない体験であったと

思われる。また、以上の方々とは別に、藤木成彦氏に父・邦彦氏についてインタビューを行うことができたことも大きな意義があった。特に藤木氏は家の歴史を『加茂藤成記』と名付けられた書にまとめておられたということで、インタビュー時に持参くださるなど、貴重な情報を多く頂くことができた。詳細はブログ報告を御覧いただきたい〔8〕。

改めて、コロナ禍の中でインタビューに応じてくださった方々に深く感謝申し上げたい。これらのインタビューの記録は、「藤木文書」とは別に、「藤木文書アーカイヴ資料」として駒場博物館に別の項目を立てた上で参照しやすい形でともに保管する予定である。

3-4. 整理と公開に向けて——個人情報問題

以上のように、これまでインタビュー(2)と研究発表(3)を中心に進めてきたが、今年度の後半は、いよいよ(1)と(4)すなわち「藤木文書」の整理と公開、そして来年3月に開催予定の展示に向けて注力していく予定である。

その上で、重要な問題となってくるのが、個人情報情報を多く含む本史料をいかに公開するか、という問題である。

「藤木文書」の概要と史料的特徴

まず、「藤木文書」の概要を見ていこう。「藤木文書」は、現在仮リストでは510件と小規模ながらも、駒場博物館所蔵の一高留学生資料の空白期間(特に1943-45年)を埋めることのできる貴重な史料である。

具体的には、留学生に関わる写真・書簡類、入学・休学・退学・進学関連書類、生徒名簿や出欠管理等校務書類、護国会の課外活動関連に加え、戦時中の特別非常措置に関する書類や各生徒の詳細な通信記録、旅行許可証等、戦時下における留学生の安全確保と管理の強化を伺わせる書類が多く含まれる点が大きな特徴といえる。もう一点は、もちろん留学生たちの個人情報が多く含まれる史料であるという点であろう。

なお文書の宛先と送り主は、学内文書、文部省専門教育局長、満洲国留日学生会館、留日学生会、中華民国教育部、大東亜省支那事務局長、駐日満洲国大使館、一高生徒主事、日華学会、警視總監、新京高等警察庁、在マニラ森重代理大使、大東亜省総務局長、中華民国留日学生輔導臨時総本部、京都帝国大、弘前高等専門学校など日本の各学校となっている。

また昭和19年の生徒内訳を示すと、中華民国64人、満洲53人、台湾から1人、フィリピンから1人(ラウレル大統領の息子)の119人となっている(『昭和十九年特設高等科及附属予科生徒名簿』3-2-2)。

なぜ学内に残されたのか?——藤木邦彦の遺志

では、こうした内容の書類がなぜ大学内に残されていたのであろうか。この点を考えると、史料をいま継承・開示することの意味ということを変更して考えさせられる。所持者であった藤木邦彦(1907-93年)は、平安朝を中心とした日本史を専門とする東京大学教養学部の教授で1968年に定年退職している。したがって、その折に大学に敢えて残していった可能性が高いと考えられる。しかし、仮にそうだとすれば、その理由は何だったのであろうか。藤木は1932年から一高の歴史の講師となり、39年には教授に昇進、その後1943年に「留学生課長」、翌年には「生徒主事」を兼任している。この「留学生課長」の時期の書類が集中して残っているのであるが、注目すべきは、1936年に一高の正史にあたる『第一高等学校六十年史』(1939年刊)の編纂事務を嘱託されている点である。ここからは推測するしかないのであるが、藤木は『一高六十年史』の続きを書くために必要な史料として「藤木文書」を学内に敢えて置いていったのではないだろうか。『一高六十年史』には、留学生の世話役をしていた藤木の編纂の影響か、留学生の課程に関しても「特設予科及特設高等科」と題された章が設けられていた。つまり留学生の歴史も確固とした一高の歴史の一部として組み込まれるべきであるという遺志が伺えるような気がするのである〔9〕。

史料の公開と活用に向けて

最後に、以上のような内容と史料的特徴を持つ「藤木文書」の公開と活用に向けて、その意義や活用法、および問題点について述べたい。

「101号館」が何の建物であったか、今ではすっかり忘れられているように、一高から教養学部への歴史の把握において、留学生を受け入れていた歴史は抜け落ちてしまっているように思われる。「藤木文書」は、こうしたまさに多層的で多声的な「もうひとつ一高」の歴史について叙述することを可能にする資料といえるのではないか。

また、「留学生課長」という役職自体、1943年より新たに設けられたものであり、その任務と実態についても追究したい。例えば、それまでもあ

った「生徒主事」との違いは何か、また一高内部の留学生に対する方針と外部からの要請との関係はどうだったのか、さらにそこには藤木自身の人柄という要素が大きく作用したことが想像される。

また EAA の理念に照らして、本史料に即して歴史を丁寧にひも解く中で、特に戦時中の一高の教養主義の意義と限界を明らかにし、その歴史を鑑としたいと考えている。

さらに、一高から巣立った留学生一人一人のその後を把握していくことで、更に様々な問題を考えることが出来るはずである。

来年 3 月の展示では、この藤木邦彦を中心にしたながらも、それぞれの留学生たちにも焦点を当ててみたいと考えている。また、展示の準備と並行して史料公開に向けての作業も進めていく予定である。

但し、ここで問題となるのが、個人情報（まだ存命の方もいる）を含む本文書をどのように公開していくか、という点である。

現時点では、・ 閲覧→制限を付けて公開・ 展示・ 研究発表・ アーカイブ化（デジタル・アーカイブにするのであれば、全目録を公開し、画像は部分のみ載せる／OR 一部アクセスに制限をつける）、といったそれぞれの場面にふさわしい制限を設ける必要があるであろう。また 3 月に予定している実物展示の場合には、個人の不利益を生じる部分などは適宜隠すなどの配慮が必要となることが予測される。

いずれにしても、本史料は規模からしても隣接史料とリンクさせていくことで重要性を増す史料に違いなく、適切な公開方法を取った上で、広く総合的に活用されていくことが望ましいと考えている。

そして、そうした歴史史料への真摯な取り組みの先に、EAA の目指す学問的な友情と、共に構想される未来が築かれていくこと、本史料がその確かな礎になっていくことを切に願っている。

文 献

- [1] 東アジア藝文書院 HP
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp>)
- [2] 一高プロジェクトのページ
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/>)
- [3] 会場 1 の Web 展示
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/exhibition-101-hi-story/>)
- [4] 会場 2 の Web 展示
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materials-archive/exhibition-101-history-2/>)
- [5] EAA 国際シンポジウム「一校中国人留学生と 101 号館の歴史」ブログ報告
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/ichiko-symposium/>)
- [6] 旧制高等学校記念館 HP 参照
(<https://matsu-haku.com/koutougakkou/event>)
- [7] 「【報告】工藤康氏インタビュー：昭和 23 年、一高最後の入学生として」
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/report-20210-719-ichiko-3/>) 及び、「【報告】田仲一成先生へのインタビュー：一高から教養学部への過渡期について」
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/report-20210-719-ichiko-2/>)
- [8] 「藤木成彦氏インタビュー：「藤木文書」調査へ向けて」
(<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/blog/hujikishigehiko/>)
- [9] 藤木邦彦の人柄については、複数の証言（回想録やインタビュー）から「温容」で「優しくかった」といった印象で共通しており、穏やかで丁寧な人当たりで、誰にも分け隔てなく接したようである。特に留学生への態度については、成彦氏の父の思い出を綴ったエッセイにおいて「一つうれしく思うのは、あの時代、皇国史観の主任教授とは一線を画し、かつ外国人留学生を擁護する立場で行動したことだ。私が仕事で台湾に出張し、父の当時の教え子の一人に面会した際、「先生は優しい方でした。差別されるわれわれの味方でした」と言ってもらえたことは忘れられない」（藤木成彦「ピートルズとリンゴ箱の机——父の思い出」『史衆』2007 年 11 月）という一節が見え、他の留学生の証言からも親身に世話を焼き、慕われていたことが伺える。また藤木邦彦自身の留学生教育に携わったことに対する認識も、「戦時中でも留学生や外国人関係との接触が多かったものですから、当時の独善孤高の国粹主義的日本史学の主流から離れ、国際社会のうちに日本史をみる考えかたを続けていくことができたことを、幸運に思っています。」と振り返っているように重要な意味を有したことが伺える（邦彦の定年退官時の文章「三十余年の駒場生活」『教養学部報』154 号、1968 年）。